

## エッセイ 中東奮闘記—湾岸50年、オイルマンの軌跡

### 第十七回 再びの栄誉

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

#### 17-1 外務大臣表彰-日オ関係への貢献を評価される

2017年6月15日に外務省から「外務大臣表彰を授与させていただきたい。受諾に関して意向を伺いたい」というメールが入った。当時、私は84歳になっていた。「84歳で？」という思いもあったが、「光栄なことです。喜んで受賞させていただきます。ご連絡ありがとうございます」と返信した。

表彰理由は、「オマーンの産業発展や人材育成のため、オマーン・日本の両国において多大なる貢献をした」とあった。

かくして、7月6日に私は家内と共に表彰式が行われる外務省飯倉公館に向った。公館への道は家内には馴染みのない道であったが、私にとっては慣れた道であった。というのも、「オマーン見聞録」を書く時の資料探しに、隣接する「外務省外交資料館」には何回となく訪れていたからであった。また、外務大臣主宰の中東大使会議の後のここでのパーティーにも参加したことがあった。

夏の暑い盛りの太陽の下で、「この坂はきついわ」という家内を励ましながら、神谷町駅から飯倉片町交差点への坂を上り、交差点を右折して会場に着いた。

会場は、大勢の人で混雑していた。当日表彰されたのは、国内の個人27人と9団体。海外の個人が160人と36団体。あわせて公邸料理人や永年勤続の外務省職員の表彰も行われた。表彰される人の配偶者、それに外務省関係者も加えると海外居住者を除いても、出席者は相当の数になっていた。

会場に着いて見渡しても知り合いの人は誰もいなかったが、テレビでよく見ていたベナン人のゾマホンが近くの椅子に座っていた。知り合いではなかったが、なんとなく目をやったら、ゾマホンも目で答えてくれた。それからまもなくして、表彰を受ける者一人一人に順次、菌浦健太郎外務副大臣から表彰状が授与された。岸田外務大臣が海外出張で急遽不在となり、副大臣が代役を務めていた。

そのうちに私の名前が呼ばれ、私は緊張しながら副大臣の前に進み出て、表彰状を拝受した。表彰状には、「遠藤晴男殿」とあり、「貴殿は日本とオマーンとの経済関係促進に尽力され、もって我が国と諸外国との友好親善に寄与し、その功績顕著なものがあります。ここに深甚なる敬意を表するとともに表彰します」、「外務大臣 岸田文雄」と記されていた。

その後、団体、公邸料理人、外務省の永年勤続職員の表彰が順次行われた。公邸料理人

の制度があることをその時初めて知った。後で閲覧した外務省の関連HPには、「優秀かつ貢献度の高い者として今回表彰される15名の公邸料理人に対しては、『優秀公邸料理長』の称号が認定されます。外務大臣表彰及び『優秀公邸料理長』の称号の認定は、優秀な公邸料理人の外交活動への貢献の意義を改めて認めるとともに、今後の優秀な公邸料理人の確保の一助とすること等を目的とするものです」とあった。

その後、記念の写真撮影があり、副大臣や個人表彰を受けるために出席した者など37名がカメラに収まった。私は年の功もあり、前列の中央近くの席に座った。

その後のレセプションでは、大勢の人と交流した。世界中に桜を植えている方、京都の茶道の先生などが記憶にある。藺浦健太郎外務副大臣ともお話をする機会があったが、「遠藤さんは、オマーン要人に人脈をお持ちだ。十分に両国のために尽くしてください」と言われたのをはっきりと記憶している。「どこかで私のことを聞いたのだろうか」とも思った。また、当日は副賞として正絹の風呂敷をいただいた。

私が初めてオマーンを訪問したのは1974年。その約10年後の1985年に再びオマーンを訪ね、1992年から1995年の3年間と1997年からの1年間マスカットに住み、JICA専門家として商工省でオマーンの若きエリートたちの中で働いた。教えることも多かったが学ぶことも多かった。世話にもなった。1997年には、よりオマーンを学ぶため、イギリスのエクセター大学アラビア湾岸研究所名誉研究員として研鑽した。そこで大勢のオマーン人留学生と付き合った。

帰国後、現地で講演を行ったり、日本では本を数冊出版した。そのうちの1冊は、後に英語版やアラビア語版がオマーンで出版された。「恩返し」の一心でオマーン人留学生の世話をしたり、日オ間のビジネス促進や学术交流の手助けをUNIDO（国際連合工業開発機関）や中東協力センターなどの公的な団体を通じてだけでなく、個人的にも行った。これらの諸活動が認められ、2007年に日本人として初めて「勲一等カブース国王文化・科学・芸術勲章」を受章した。

首都圏にオマーンの友好団体がなかった2010年には、森谷OCIPED（オマーン投資促進・輸出振興センター）日本代表や仲間たちと「オマーン好き人間」を募って日本オマーンクラブを立ち上げた。会員約200名。講演会、日オ学生の交流促進、オマーンニュースの配信、懇親会など国内でもっとも活発に活動している国際親善友好団体と自負するまでに成長した。

その頃だったろうか、オマーンとの交流のことである国会議員の事務所に電話をする機会があった。その国会議員は個人的に知っていたが、私と面識のなかった応対に出た秘書から、「あなたはどこの会社で働いていたのですか」、「その会社では、どこのポストまで行ったんですか」と身分チェックをされた。

私は、「丸善石油で次長で退職している。丸善石油からの出向先では部長職を、丸善石油を退職してからはアブダビ興産という小規模な企業では役員をしていたが、社会的にはゼロ評価なんだ。本を出版していますと言っても、それは社会的な評価にはつながらないのだ」

とその時思い知った。また、「政治家の秘書ってこういうことを訊くのか。政治家と話すのに肩書が必要なんだ」と思い知った。

「それとは異なり、無名な男でも、一所懸命励めば、どこかで見てくれている人がいる。オマーンへの活動ぶりを見ていて評価してくれる人がいたんだ」とつくづく思った外務大臣表彰であった。

## 17-2 春の園遊会 - さらに続く榮譽

私にとっての榮譽はまだ続いた。

2018年3月中旬に外務省を通じて「春の園遊会に夫妻を招待したいが、出席を検討したい」との連絡が入った。園遊会などは私には別世界のことで、思ってもみない招待だったが、たいへんに名誉なことであり、「家内と出席させていただきます」と回答した。

出席の返答はしたものの、まず頭に浮かんだのは、着るものだった。何を着ていけばよいのか。外務省に聞いてみると、一般的な基準として、男性はモーニングコート、紋付羽織袴、制服又は背広、女性はデイドレス、白襟紋付又は訪問着等とのことであった。それでも不安だったので、友人の入江誠元東宮侍従にも電話で聞いてみた。「モーニングでも、背広でもよい」ということであった。

私がモーニングで家内が着物か洋服か、2人とも洋服かという選択が残った。私たちはモーニングも着物も持ち合わせていない。作るか借りるか。このためだけに作るのはどうなのか。そこで、2人とも洋服にすることに落ち着き、2人で洋服を新調するべくデパートに走った。着るものについては、これで解決した。

次に当日の会場である赤坂御苑への行き方が問題であった。青葉台から青山までハイヤーかタクシーを使うか、娘の車に送ってもらう案も考えた。娘の車は無理だろう、最低タクシーかなと案じていた。前述の入江に相談すると、園遊会の会場はトイレが少ないとの情報をもらったので、行きに青山一丁目駅のトイレを使うことにし、青葉台から往復電車で行くことを選択した。「電車で行く人はいないかもしれない」と思いながらの選択であった。

宮内庁からの正式な招待状は、3月29日に自宅に届いた。菊の御紋章入りの宮内庁長官からの分厚い招待状であった。それまでもらったどの招待状よりも立派なものであった。当日の4月25日には、午後1時から1時50分までに参入するようにとあった。

当日の天気については、4月18日ぐらいからテレビで連日確認を続けたが、「25日は雨」の予報にやきもきする日が何日も続いた。直前の24日の予報でも、「翌25日の午前中は、雨は雨でも強風も吹く大荒れの天気。15時ぐらいから曇り、夕方また雨があるかも」との予報であった。当日の25日の朝の横浜では、あるいは園遊会が中止になるのではないかと思うぐらいの激しい雨とかなり強い風が吹いていた。11時半過ぎに家内と家を出た時には雨は止んでいたが、2人とも折り畳みの傘を持参した。

11時57分に青葉台駅発の急行で青山一丁目駅へ向かった。駅のトイレに行くと、園遊会に行くらしい夫婦2組を見かけた。一組のご主人はモーニング姿でもう一人の方は背広、奥様は両方とも和服姿であった。「モーニング姿で電車に来る人もいるんだ」と私はほっとした。しかも、いずれのご夫妻も駅のトイレに入った。「同じ考えの人がいるものだ」とさらに安堵した。

会場の赤坂御苑に入ると、あちらこちらにテントが張ってあり、そこでは、焼き鳥、サンドイッチ、カナッペ、ちまきなどの軽食やジュース、日本酒、ワインなどの飲み物が用意されていた。私たちは、少し歩いたところの菖蒲池テントで飲食をした。そこにはテレビでよく見かける人も何人かいた。ここは、こういう方たちが来る場なんだと緊張もした。それから、天皇皇后両陛下がお廻りになられる道路沿いに自分たちが並ぶべき場所を探した。

今回の招待客は、中央官庁が分野ごとに推薦した各界の功労者のほか、三権の長や国会議員や官僚、自治体関係者らとその配偶者などの2500名。スポーツ界からは、北京オリンピックで活躍したスケートの羽生結弦選手、小平奈緒選手、高木奈菜・美帆姉妹、スキーマの渡部暁斗選手、スノーボードの平野歩夢選手などなど、文化関係では国民栄誉賞を受賞した将棋の羽生善治名人と囲碁の井山裕太棋聖、コシノジュンコなどが中心的な場所に並んだ。私と家内はそこから10メートル余り向かって右側に場所を見つけて並んだ。

スポーツ選手や文化人の席には両陛下が立ち止まられ、話を交わされた。その写真を撮るためだろうか、私たちが並んだ道を挟んだ左の向かい側には、メディアのカメラが数十台も何段かに並んでいた。新聞社、テレビ、雑誌、週刊誌などなどのカメラであったろう。こんなに多くのカメラを目の当たりにしたのは、私には初めての経験であった。

スポーツ関係の女子選手は華やかな振袖、羽生名人や井山棋聖は和服姿、中心部の席は華やいだ空気に包まれていた。両陛下がご到着される前にこれらの人が私たちの目の前を通って席に着くと、園遊会に招かれた著名人の奥様方も写真を撮るためにわれ先にとその前に群がった。こういう上流の奥様方も、けっこうミーハー族なんだと私はいささか安堵した。

見ると、私たちのすぐ前の列に和田アキコが立っていた。天皇皇后両陛下は一連の式典の後に、2時20分ごろから会場を廻られた。心配していた天気の方は、予想がまったく外れて陛下がお出ましになられたころには快晴となり、気温も24℃に上がって、恰好の園遊会日和となった。こんな天候の急回復は不思議なことであり、両陛下のご威光のせいかと思われた。

両陛下はオリンピックの選手たちに話かけられた後に、私たちがお待ちする前をにこやかなお顔で通り過ぎられた。私どものところではお声がけはなかったが、数メートル左での出席者とお話をされておられた。続いて、皇后陛下、皇太子殿下、秋篠宮殿下、紀子さま、信子さま、久子さま、真子さま、彬子さま、瑤子さま、承子さま、絢子さまなどの皇族の方々が、三々五々前を通られた。列席者とそれぞれの方が自由にお話をされるように

との趣旨からか、とくに連れ立つこともなくご自由に前を通られていた。すぐ前の和田アキコと話をされた皇族の方も何人かおられた。

私のすぐ前に立つ和田アキ子は、大阪市の出身で、18歳の時にレコードデビュー。私が丸善石油の大阪本社に勤務していたころ、阪急デパートの屋上のビアガーデンに据え付けられたテレビで、彼女の代表曲の一つになった「笑って許して」の映像を見た鮮烈な記憶がある。せっかくのチャンス、話しかけをすればよかったと思ったが、話をせずに終わった。残念であった。

結局、同郷のスノーボードの平野歩夢選手に話しかけ、それに既知の国会議員の2組の夫妻と話をするに止まった。

帰りに、参加者にはお土産の下賜があった。われわれ夫妻は「菊焼残月」を1箱ずつ拝領した。園遊会が終わって、われわれは会場から青山一丁目の駅まで歩いたが、歩いている人は誰も居らず、いささか恥ずかしい思いであった。

帰宅してから、両隣りの家と近所に住む次女に「菊焼残月」を配り、榮譽のおすそ分けをさせてもらった。

### 17-3 世界昆虫標本寄贈(1) - 待ち焦がれたマスカット訪問

2019年4月19日の早暁、私は中江信と小原みね子とドーハ空港のカタール航空のファーストクラス・ラウンジの入口に立った。前夜の10時20分に成田を発って、カタールに着いたのが午前4時10分。この間はビジネスクラスでの旅だったが、ここからマスカットまではファーストクラスの席が用意されていたので、降機後にこのラウンジに移動してきたのだった。

それにしても、なんという豪華なラウンジなのだろう。入口が広い。その先に見えるラウンジがまた広大で、天井が異常に高い。煌々たる灯りに照らされた椅子席が広がっていた。私も何回かはファーストクラスの旅をしている。そのため、いくつかの空港のファーストクラスのラウンジは経験している。その中でも何回か利用したドバイ空港のエミレーツ航空のファーストクラス・ラウンジも素晴らしかったが、カタール空港のファーストクラス・ラウンジは、比べようもない広大さであった。圧倒された私は、「もう湾岸はドバイの時代ではなく、カタールの時代かも」と感じた。

こんな広大なラウンジも早暁のせい、利用客はわれわれ3人だけだった。いささか寂しい思いはあったが、ゆっくりと寛いで朝食を摂った。ビュッフェではなく、アテンダントが一人一人に注文を聞きにきてくれるので、豪華な気分になることができた。

こんな豪華な旅につながるまでは、思えば長い道のりがあった。

2016年8月のクラブ会員でもある中江も同席した日本オマーンクラブのサマーパーティーの席上で、久枝譲治元駐オマーン大使から、世界の昆虫(蝶・蛾、カブトムシ、セミ)数千頭の標本をオマーン政府に寄贈するプロジェクトについて、私にオマーン側との折衝

をするよう依頼があった。「えっ？大使ご自身がやられたら」とも思ったが、「遠藤さんの方がよい」というお話なので、この依頼を引き受けた。

「私は民間人。さーて、政府と交渉しろと言われてもどうしたものか」と思いを巡らし、駐日オマーン大使にも相談をした上で、オマーンで夏休みが終わった10月に入って、旧知のオマーン要人に標本寄贈の意志を示し、オマーン国立博物館館長宛てに提案することについて了解を求めた。彼からはすぐに、「この案件は、博物館の館長レベルの話ではない。大臣マターの話なので、大臣に提案するのが適当である。良ければ自分が繋ぐ」との返事が返ってきた。そこで、私は彼に折衝役を依頼することにした。

12月に入って要人から、「文化遺産省次官にコンタクトした。その後次官から大臣（現ハイサム国王）に繋いでもらったが、大臣は感謝の意を示された上で、同省構内にある自然科学博物館での展示を言っておられるようだ。詳細は次官と詰めるようにとのことなので近く次官に会うが、間違いなく寄贈してくれることを確認して欲しい」との依頼があった。私は彼に蝶標本約3500頭（90箱から100箱）、蛾・カブトムシ・セミ合計約400頭（10箱）の寄贈を確約した。

一方で、経緯を久枝元駐オマーン大使を通じて当時の駐オマーン日本大使並びに外務省中東二課長にも報告し、本プロジェクトへの支援を要請してもらった。久枝元大使からは後日、「同課長もできる限りの支援をすることと駐オマーン日本大使への連絡もすると述べた」との報告をいただいた。

同年4月初めになって、前述の要人から「次官と話したところ、遺産文化省は予算がないので受け入れられないと言ってきた。別の対処方法を考えてみる。時間が欲しい」との連絡が入った。「どうなるかな」と訝っていると、4月末になって彼から、「寄贈先を遺産文化省から国王府（Diwan of Royal Court）宛に変更して、国王宛に提出資料を整備し手紙を書いた」、「国王府は快く寄贈を受けてくれた。標本を国王府宛に空輸するように。輸送費・保険費などの必要経費はすべてオマーン側で負担する」との連絡が入った。

これに従って、標本を成田空港から6月9日に配送し、同11日にドーハを経由してマスカットに無事到着した。なお、最終的に、標本の数当初予定した数より大幅に増えて約7000頭となった。内訳は、蝶標本約4500頭（120箱から130箱）、蛾・カブトムシ・セミ合計約2500頭（20箱から30箱）であった。

その後のオマーン側との調整には、思ってもみなかった長い時間がかかった。日本側からは、荷物のチェックや修復のために何回か専門家の派遣を提案したが、なかなか進まなかった。

同年9月には、専門家2名の派遣を提案した。要人からは「11月のナショナル・デー時の訪オがあり得る」との返事ももらったが、結局実現しなかった。

次に、2017年初めの専門家3名と元駐オマーン日本大使と私の計5名のオマーン訪問を提案したが、これも実現しなかった。同年9月に、専門家2名の11月オマーン訪問を提案したが、これも実現しなかった。

2018年に入って、専門家2名の1月から2月のオマーン訪問、3月には、同5名の3月中のオマーン訪問を提案したが、いずれも実現しなかった。

同年8月に、要人から「11月訪問の可能性が出てきた。それまでに、オマーン内陸部のマナで建設中の国立博物館に隣接する場所に、標本の展示場を作る。開館時にオマーンに来てもらう5人の訪問についても、国王の了承をとるよう国王府が作業を進めている」との連絡があった。しかし、これも実現しなかった。

2019年に入ってから何回も要人に「標本の損傷があれば直す必要があり、このまま放置すると標本から油がしみだす恐れもある」、「私も年で、遅くなると訪オできなくなる」とも書き送り、遂に3月下旬になって「国王府でミスターエンドーを含めて3人を招待する」という返事をもって、出かけたのが今回のオマーン行きであった。

私はこのプロジェクトの調整役としての位置づけ、中江と小原は寄贈者・蝶の収集・専門家という位置づけであった。

マスカットには、カタール航空のファーストクラスで19日の午前10時20分に無事に到着した。空港には、友人のオマーン要人や国王府の職員数人が迎えに出てくれており、

VIPルームで待つ間に荷物の通関や入国手続きも済ませてもらい、国王府の車でケンピンスキー・ホテルにチェックインした。国王府は、「滞在中自由に使用するように」とドライバー付きの大型車1台を支給してくれた。

#### 17-4 世界昆虫標本寄贈(2) - オマーンで蝶々捕り

マスカットに到着したのが金曜日。翌日の土曜日でもオマーンでは休日なので、2日間の連休となった。初日は国王府の車を使っての市内観光や買い物で過ごし、夜は空港にも出迎えてくれた要人が歓迎の夕食会を開いてくれた。場所は、開店したばかりのオマーンの名城を模したオマーン料理専門店の「アル・ロズナ」。

われわれを歓迎するために集まってくれたのは、要人と会社社長である息子さん、エクセターで学友だったムカッダムSQU(スルタン・カブース大学)教授、元駐日オマーン大使が2名、国営石油会社社長を始め10人余りの懐かしい顔のオマーン人が揃った。

2日目は、われわれ3人はホテルを朝7時に出て、マスカットから西260キロの場所にあるニズワ近くのワジ・タヌーフに支給された車で蝶々捕りに出かけた。

同行の中江と小原は蝶の捕獲のプロフェッショナル。捕獲に必要な網などは私の分も含めて、日本から用意してきた。現地の案内役は、私が日本からアレンジしたニズワ出身で元日本への男子留学生のハイサム。ニズワ市内のホテルでハイサムと落ち合って蝶々捕りの現場へ。彼が2016年に東海大学を卒業して以来、3年ぶりの再会であった。

一行は、2人のプロと蝶々捕りは初めてのハイサムと数十年ぶりに行う私の4人。オマーンで、いや中東で蝶々を捕るのは、私にとっても初めての経験だった。日本を出る時に「あ

んな暑いところで蝶々捕り？やめなさい、倒れるから。あなたは、もう86歳なのよ！」と家内や娘たちからきつく言われていて、細心の注意を払いながらの蝶々捕りであった。

最初はワジ・タヌーフの川べりだけでとを考えていたが、ハイサムが近隣のワジ・ナハルの丘やワジ・ハムラの畑にまで連れて行ってくれ、蝶々捕りは昼過ぎまで続いた。終わってからは、ハイサムがニズワ郊外の実家での昼食に招待してくれ、お父さん、ハイサムの兄弟、姉妹のご主人たちも含めて楽しいひと時を過ごした。屋敷は、敷地は300坪ぐらい、建坪も優に100坪はある豪邸で、「オマーン人はよい暮らしをしているな」と改めて感心した。

蝶々捕りは、それから3日後の23日にも行われた。場所は、マスカットから南方100キロ余りのワジ・ティウイとワジ・シャブ。国王府の職員1名が同行してくれた。ワジ・シャブはオマーンの景勝地。ボートで広い水場を渡るという経験もした。2日間の蝶々捕りで私の3頭も含めて、約40頭を採取。小原が1部を標本にしてくれて国王府に寄贈した。その時に、砂漠のオマーンにも、オアシスには約75種の蝶が棲息していると小原から教わった。砂漠の国であろうが、水があり、草が生えていれば、蝶々は育つのだそうだ。

この蝶々捕りには、後日談がある。

その年の秋に、東京大手町の産経会館で昆虫標本の即売会があった。これには日本中から昆虫の愛好家が集まり、その規模は世界でも有数なものであると聞いた。「即売会では、中江と小原がオマーンで採取した蝶々の標本を出展する。私にも見に来るように」と誘われた。

大手町駅から現地に向かう道すがら、同方向に急ぐ人が大勢見受けられた。エスカレーターで向かった会場の3階と4階には、室内だけではなく、室外の廊下にまでにショーケースに入った昆虫標本が並べられていた。室内も廊下も押すな押すなのもの凄い人ばかり。人をかき分けながらようやくのことで、3階で蝶標本が並べられているガラスケースを前にして売り子をしていた中江を見つけ出した。近づくなり、「遠藤さんもこっちに入ってください」と言われて、いくつも並んでいるガラスケースをずらして、中への通り道を作ってくれた。つまり、私にも、ケースの内側に立って「売り子をしろ」ということであった。この歳でオマーンで蝶々捕りを何十年ぶりにさせられた上に、人生初めて蝶標本の売り子をしろということであった。「何事も経験」と私は引き受けた。

すぐに客が来た。70代ぐらいの男性。背にはリュックサック。聞いてみると、「今朝、大阪から新幹線できました。先ほど東京に着いたばかりです。あっちでこの蝶標本をさっそく買ってきました。1万円ほどでした。今日の予算は10万円、よい買い物をしたいものです」と言う。「全国からこういうマニアが集まっているのだ」と実感した。

小原は4階で店を開いていた。「彼女はオマーンで卵の状態で見つけて、その後孵化させた蝶々6頭の標本を一頭6千円で売り出したが、すべて売れた」と聞いた。私が売り子をした蝶標本の中には、私がオマーンで捕った蝶も含まれていて、「1頭800円の値がつけられて売り出されたが、1頭も売れなかった」と聞き、いささか羨ましくもあった。

この年にはもう一つ、珍しい経験をした。

それは、5月11日午後のことだった。私は、東京の白金台にある八芳園での知人女性の

結婚式に招待された。彼女が大学1年生の時に、東京都心で700人の観客を集めて行った「アラブ衣装のファッションショー」を支援したのを皮切りに、彼女が早稲田大学からスタンフォード大学大学院に進む際に推薦人を探すのを手伝った縁での招待であった。参列者は300人超。

宴もたけなわになったあたりで、餅つきが会場の外の庭で始まった。彼女のご両親と子供の時に中国から日本に来て日本に帰化した人、もともとは中国人。結婚する相手はスタンフォード大の同級生の中国人。披露宴での食事は中国料理であった。餅は、中国式のスイーツとして供されるためのものだった。

司会者から「どなたでも、餅つきに参加してください」との案内があると、花嫁さんからすぐに、「遠藤さーん、ついて！」と声がかかった。これは、もうやるしかない庭に降りて、何人かの人と一緒に餅をついた。まだ、新潟にいた子供のころ、大人に交じって正月用の餅をついた記憶があるが、それからもう70年以上は経っていた。

蝶々捕り、蝶標本の売り子、餅つきと2019年、私が86歳の年は珍しいことのオンパレードであった。

#### 17-5 世界昆虫標本寄贈(3) - ブサイナ王女からの書簡

話をオマーンに到着して3日目の2019年4月21日に戻す。私たち一行は、今回のオマーン訪問の実現に動いてくれた要人と一緒に9時半に国王府に出向いた。紹介されたキナウィ博士以下3名の国王府担当チームと共に、2017年6月11日にオマーンに到着して国王府に箱に入れられたまま手つかずに保管されていた蝶・蛾、セミ、カブトムシ7000頭の標本のチェックを行った。破損が20頭位だけであることを確認し、この修理を行い、すべてが展示可能となった。初めて標本を見た国王府チームは、その質の高さに驚嘆していた。

夜は、国王府の招待で要人と私の友人のオマーン人の大学教授ムカッドムと私たち3人で、世界的に有名なブラジル人によるジャズ演奏をマスカットのオペラハウスで聴いた。私には、人前でも人目を気にも掛けずに抱きついてきてくれるオマーン人女性の知人が2人いる。そのうちの一人がこの大学教授の奥方。開演前、このオペラハウスの人だかりの中、人目もはばからずに、「オオ！ミスター・エンドー！」と抱きついてきた。聞いてみると、彼女はその夜招待されていたわけではないが、私に会うため、わざわざ劇場ロビーまで来てくれていたのであった。嬉しいことではあったが、人前だけに面映ゆかった。

4日目の22日9時30分から国王府で、くだんの要人同席の下、私と中江、小原が国王府事務担当大臣、王立施設長官と面会し、当方から、浜松市天竜区の連鶴作家の松島英勝が率いる「遊鶴の会」の女性グループが作成した見事な連鶴を贈呈した。それが日本の無形文化財であることも説明した。

また、小原から蝶柄のお好きなブサイナ王女に日本の国蝶オオムラサキと両国に棲息す

るキアゲハの標本を贈呈することを提案して受諾された。

オマーン側からは、マナ（Manah）に新設されるオマーン過去から未来へ博物館（Oman Across Ages Museum）で、日本から寄贈された標本を常設展示する方針である事が説明された。また、翌2020年のカブース国王在位50周年記念事業の一環として、マスカットのオペラハウスで展示する考えも示され、サララ、ソハール等での移動展示も検討されることとなった。

その日の午後1時から、要人とわれわれ3人が担当大臣の招待で、ロイヤル・オペラ・ハウス内のオマーンいや湾岸でも最高級レストランと称されるアル・アングム（Al Angham）で豪華なランチをいただいた。帰りに王族たちだけが食事をされる部屋も見せていただいて、われわれは大いに感激した。

5日目の23日は、ワジ・ティウイとワジ・シャブでの蝶々捕りを終えてマスカットに帰着したのは夕方近くであった。夜は、日本大使公邸に招かれ、大使や公使と情報交換をさせていただいた。標本についての現状やオマーンでの今後の展示予定、国王府担当大臣との面談、前夜のオマーン商工大臣との私邸での個人的な面談などについて報告をさせていただいた。大使館では、「いままで国王府の車で公邸に来た日本人はいない！」と驚かれた。

6日目の24日は、当初は市内観光の予定であったが、前夜遅くに国王府からわれわれの中で紅一点の小原に「ブサイナ王女が明日会われるかもしれない。小原だけ朝10時半に国王府に来るように」との連絡が入り、市内観光は急遽中止になった。

「ご面会が許されれば、これ以上の榮譽はない」と小原は要人と朝早く国王府に参上した。私と中江は、要人の奥方たちと町の喫茶店でお茶を飲みながら、帰りを待った。小原は結局ブサイナ王女にお会いできずに、要人と共に昼前に帰ってきた。王女のご都合が悪くなったということであった。

ただ、小原は王女からサイン入りの同氏宛の書簡をいただいていた。書簡には「美しい献上品へのお礼と、突然の都合でお会いできないことへのお詫びが述べられていた。そして、最後に「日オの関係の発展、両国民のさらなる発展と繁栄と小原さんならびに家族のご健康を祈ります」と結ばれていた。これ以上ない名誉なことであった。

私には、今回の旅でもう一つのプライベート・ミッションがあった。それは、オマーン人の元日本留学生と会うことであった。一堂に集めてパーティーをする方法もあったかもしれないが、とくに親しく付き合った留学生たちと個別に会うことにした。

ハイサムとは蝶々捕りの時に、会っている。そこで、一番多く横浜の自宅を訪れた農漁業省に勤務するサラ博士、中野の成願寺で前年の年末年始を過ごし、いまはマスカット市内の大学で教鞭をとるイーマン博士、民間企業に勤めるハジャル、三菱商事留学生第1号で家業を引き継いだセイフ、私の自宅近くでインターンシップをしていて、わが家にも来たアブドルラヒームの女性3人、男性2人の計5人を1晩に1人ずつホテルに招いて懇談した。

毎日昼も夜も予定が入っていたので、会うのは夜の9時半過ぎ。「女性は出にくいか

な」、あるいは、「男性が随行して来るかな」とも思ったが、驚いたことに女性たちは夜遅くそれぞれが自分で車を運転してきた。それに、中には握手を求めてくる女性もいた。私が駐在していた1990年代では考えられない変わりようであった。

私がこの前にオマーンを訪れたのは2014年6月のことで、まだ何年も経っていなかった。それなのに、マスカットの街は道路が一層整備され、大きくなっていった。海岸でサッカーをしているオマーン人で、デスダーシャを着ている人はいなかった。皆、半ズボンとシャツであった。蝶々捕りをしたワジ・タヌーフで、ホンダのバイクを乗り回している若者たちもズボンとシャツ姿であった。短期間にオマーンも変わっていた。

そういえば、われわれが泊まったドイツ系のケンペンスキーホテルは、2018年3月に建ったばかり。場所はアル・ムージュ、マスカット国際空港北側に新しくできた街の一角にあった。

#### 17-5 世界昆虫標本寄贈（4） - 明治時代に日本から寄贈された椅子との再会

オマーン滞在4日目の2019年4月22日の昼前に、再び話を戻す。私はオールド・マスカットのアラム王宮の真向かいにあるオマーン国立博物館の2階の「オマーンと世界」という一角に展示されている古びた蒔絵椅子をじーっと見つめていた。感無量の思いをもつての椅子との再会であった。

それは、2011年11月に私がオマーンを訪問した時のことだった。オマーン人要人から「ルイの国立博物館に行つて欲しい。プロフェッサー（勲一等を拝受してから、私は、オマーンではプロフェッサーと呼ばれていた）に見てもらいたい物がある」というので、私は古びた博物館を訪ね、そこでジャバル館長と落ち合った。館長は、要人の秘書のオマーン人女性のご主人とのことであった。

「見てもらいたいものは、こちらです」と館長に案内されて階段を上った2階の部屋。扉を開けると、そこには椅子類が雑然と重なって置かれていた。天蓋付きの立派なベッドも一つあったような記憶がある。いずれも、諸外国から王室への寄贈品であるとの説明であった。「この椅子ですが、これ日本のものではないかと思いますが、どうでしょうか」と館長が一脚の椅子を指さしながら私に訊ねた。「いま、オールド・マスカット地区に新しい国立博物館の建設予定があり、日本のものであれば、そちらに展示しようと計画をしています。そのために確認したい」とのことであった。

本エッセイでは何度も触れているが、1880（明治13）年6月25日に吉田使節団の副団長格であった陸軍工兵大尉古川宣誉が、ペルシャに行く途次に記録上、日本人として初めてマスカットに上陸した。その古川が出発してから数日後の7月3日に、伊東祐享海軍中佐（後に元帥に昇進）率いる軍艦「比叡」（当時の正式呼称は比叡艦）がマスカット港に入港したことと、その後の国王とのやりとりについては前回第十六回で詳しく述べた通りである。

贈り物に絞って簡単にまとめると、比叡艦がマスカットに入港後、トルキー国王からブドウ、マンゴー、菓子、山羊、牛、デザート、桃などが同艦に届けられた。余談だが、「桃がオマーンにある？」と訝る人もいようが、日本のそれとは異なり、小さく平べったいものだが、桃がオマーンにもあることを付言しておく。

入港後の翌4日に伊東祐享艦長、本宿宅命大尉など12名が最上級の正装である大礼服を身に着けて、日本人として初めてオマーン国王に拝謁した。その時に、蒔絵椅子2脚と伊万里焼の花瓶一对を献上したことを読者の皆様は覚えておられるだろうか。

花瓶一对のうちの一つは、「日本との文化交流」、「花木模様の六角先細伊万里焼徳利」、「18世紀初頭から19世紀の製品」との説明付きでこの古びた国立博物館に展示されているのは、同館を何回か訪れる都度確認していた。

椅子の方が、こんな倉庫のようなところで置かれていたのは知る由もなかったが、「蒔絵は日本のものだろう。この椅子は、比叡艦訪問時に献上されたものではないかな」と思った私は、「日本のもののように思われる。ただ、私は専門家ではない。日本の専門家に鑑定してもらい必要がある。専門家派遣もアレンジできるかも」と、館長に答えた。

帰国後の2012年1月に、私は皇室御用達の日本橋にある漆商の店を訪ねて、鑑定をお願いできるか訊ねたが、「私は取り扱い業者です。鑑定は、専門家の方でない」と断られた。その後に、中東での「戦友」である讚井邦夫に紹介してもらった東京国立博物館の方に私が見た椅子の写真を送って鑑定を依頼したら、「博物館内の漆工芸担当の者に見てもらったが、写真だけで判定するのは難しい」という回答があった。

その時に、「桜花蒔絵小椅子（さくらばなまきえこいす）というのが明治村にあるそうです。オマーンにある椅子とよく似ていますね」と写真のコピーを送ってくれた。そこには、「イギリス人コンドルの設計で、1883年竣工した鹿鳴館で使用された椅子。19世紀半ばからイギリスで流行していたバルーンバックスタイルに日本の伝統的な漆や蒔絵で装飾された、和洋折衷という言葉にふさわしいものである」との説明が書かれていた。

オマーンの国立博物館館長に「鑑定は実物を見ないと無理というのが、専門家の意見」という連絡を入れたら、何ヶ月か経って館長から「日本人の専門家を送ってほしい」という依頼が入った。私は、くだんの東京国立博物館の方の紹介で同博物館を訪ねて担当課長と面談、専門家のオマーンへの派遣を依頼した。博物館の事務所を訪ねたのは初めてであった。担当課長にとって私は一介の定年退職者であるが、館員の紹介のおかげもあったのか、あるいは私の話に興味を持たれたのか、専門家の派遣を承諾してくれた。選んでくれたのは、大学院卒で蒔絵漆器担当の女性専門家の竹内奈美子。

それまで竹内にはまったく縁のなかった中東のオマーンに、単身で行ってもらったのは同年8月27日から29日。迎えに出てくれたのは、オマーン国立博物館差し回しの運転手。異郷の地、オマーン人の真ただ中に飛び込むことになった竹内は、本当に大変だっただろうと思われる。感謝であった。

竹内はルイの国立博物館の倉庫に通い、その判定結果は、「比叡艦の乗り組み員が当時

のトルキー国王に献上したものと思われる」というものであった。かくして、あの倉庫で見た蒔絵椅子が、新装なったオマーンの国立博物館の中で、いま私の眼前にある。広めの台座におかれた椅子は、薄暗い照明の中にそっと置かれていた。

この博物館は2016年7月にオープンしていたが、2014年を最後にオマーン訪問が途絶えていた私にはどうしても訪れてみたいところであった。今回の蝶寄贈の訪問の超過密なスケジュールを縫っての訪問であった。

その説明文もじっと目を凝らして読んだ。「品目：椅子」、「原産地：日本」、「ヒジュラ暦13世紀／西暦19世紀」との表示の後に、「この椅子は、日本の軍艦「比叡」がヒジュラ暦1297年7月（西暦1880年7月）にマスカットに立ち寄った際に、艦長の伊東海軍中佐からスルタン・トルキー・ビン・サイード・アルブサイディに献上された寄贈品の一つである。純金粉を散らした漆を用いた「蒔絵」が本椅子の特徴である。この種の椅子は、もともとは日本の朝廷の貴族向けに造られたものだが、富と力の象徴として、後には宮家などでも用いられた」との説明があった。

この説明文は、実は、当初、館長から私が書くように依頼されていたのだが、その後連絡がなく、結局在オマーン日本大使館に依頼したと聞いた。

なお、寄贈したのは蒔絵椅子2脚とあったが、現存するのは1脚だけ。館長の説明によると、1972年に200年以上の歴史を誇ったオールド・マスカットにあるアラム宮殿を建て替えた時に、椅子と花瓶はそれぞれ1脚と1個が陸路と海路でサララのホスン宮殿に運ばれたが、船が沈んでしまい、各々1脚と1個だけが残ったとのことであった。

また、同博物館には、日本のものとして、椅子と花瓶の他に鎧兜一式が展示されている。なお、オマーンで鑑定に当たってもらった竹内は、2019年8月に病没された。衷心より哀悼の意を表したい。

## 17-6 世界昆虫標本寄贈（5） - オマーンのマダムたちとの再会

われわれが蝶の標本を寄贈するためにオマーンを訪問する約3週間前の3月29日に、われわれとオマーン政府をつないでくれていた要人から入ったメールの最後に、「ところで、私の家内が親戚の女性たち3人とともに桜を見るために東京と京都を10日間訪れる。出発は、4月1日。旅の行程は旅行代理店を通じて予約してあるが、お茶でも飲む機会があればと思っている。東京のホテルは追って連絡する」というメッセージが付け加えられていた。

オマーン訪問の際に私がこの要人宅に招かれる都度、奥様は客の前に姿を見せてはいたが、一言あいさつを交わす程度で、折り入って話しをしたことはなかった。さて、どうしたものかと思ひながら、到着の翌日である4月2日に、私は家内、娘の智子、孫娘の優花里と共に、連絡のあった投宿先の椿山荘に向かった。娘と当時大学2年生だった孫娘は、通訳兼雑用係としての役割を期待して同行を依頼した。

9時ごろにはホテルに出向いたが、昨夜夜中にチェックインしたとかで、オマーンのご婦人たちがロビーに出揃ったのは10時過ぎ。要人の奥様であるラフィア、従姉妹のスライヤとアイシャと、姪のマリアムの4人。ラフィアは60歳前後、スライヤは50代後半、アイシャも50代、マリアムは30歳代というようなメンバーだった。

みんな揃ったところで、椿山荘の庭が一望できるレストランでお茶を飲んだ。庭内には桜も咲いており、人も出ていた。「みんな、口元を白い布で覆っている。あれは何？」とさっそくの質問。

日本では、マスクをしている人は日常どこでも普通に見られるが、アラブのご婦人たちには、マスク姿は珍しいようだった。メンバーの世話役を担っていたスライヤが「ああ、あれはマスク？アレルギー対策？」と言うので、「そう、花粉対策だよ」と説明した。

世界中で猛威をふるった新型コロナウイルスは、この時より9ヶ月ほど後の2019年末に中国の武漢で発生したと考えられている。日本で最初の感染者が発見されたのは2020年1月、オマーンでは同年2月なので、マスク姿がオマーンでも見慣れたものとなったのはそれ以降のことである。

オマーンの森林率（国土面積に占める森林の割合）は0.01%で、67%の日本と比べると「木がない」と言ってもいいだろう。そのような国の住民で花粉症とは縁のないオマーンのご婦人たちにとってみれば、当時マスクをする人々は奇異に映ったようだった。

オマーンはイスラーム社会であるので、地方ではまだ、バルカで顔を隠しているご婦人もいる。「顔を覆っている姿には慣れていないはずである」と考える方も読者の中にはおられるかもしれない。しかし、女性の社会進出が進んでいるオマーンでは、今は都市部では顔を隠している女性は見られない。そのこともあってか、日本婦人たちのマスク姿に違和感を覚えたのかもしれない。

その日は、ホテルから2台のタクシーで目白駅に出て、そこで日本の電車を経験してもらうことにして山手線で渋谷に向かい、ハチ公の銅像前で記念撮影をし、近くのビルの屋上から世界的に有名な渋谷のスクランブル交差点を見物してもらった。

そこから、タクシーで明治神宮へ。「日本の神様は酒が大好き！日本人は神にあやかうと酒を飲む。これが神様に献上された酒樽！」、「神社にお参りする時には、日本人は身を清める！イスラムのウドゥー（清め）と同じ」、「神社の本殿には仏教と違って装飾品がない。御神体はあるが、モスクのようだ」などと例によって、私の独断的な説明をし、その後境内のレストランで、日本食をふるまった。日本食と言っても、彼女たちが選んだのは、日本の「丼物」。ずいぶん気に入ってくれた、思いもよらないことだった。

「ハルー、一緒に写真を撮ろうよ！」とラフィアから声がかかった。食事を終えて、明治神宮から外への出口のところで、通りかかる人に日本の着物を着せて写真を撮る店がでていた。私の先を歩いていたラフィアは「私、着物を着て写真を撮りたい」と言い出し、既に着物に着替えて、さらに和傘までさして写真を撮ってもらっていた。そこで、私に向かって大声で呼びかけてきたのである。思いもかけない呼びかけであったが、私がNOと

いう理由もない。そこで、彼女との相合傘の写真となった。1992年に商工省の同僚のオマーン人女性と撮って以来の、オマーン女性との相合傘での写真撮影であった。「一緒に写真を撮らせてもらってよいのかな」とご主人であるオマーン要人の顔が目に浮かんだが、オマーン人女性との再度の相合傘の写真は悪い気持ちはしなかった。

私は、ラフィアに続いて、スライヤ、アイシャ、それにマリウムとも一緒に写真を撮った。4人ともなかなか積極的だった。スライヤの義弟はオマーンの重要閣僚、ラフィアのご主人も次官待遇の役職にあったから、彼女たちはオマーンの上流階級の人たちだ。こんな大胆な行動は考えにくかった。そういえば、食事の時に「私たちはザンジバル育ち。普通のオマーン人女性と少し違うかも」と言っていた。英語もみんな上手かった。行動は出自のせいだけだったろうか。

食事中の会話でも、「私たち、よく一緒に旅行しているの！楽しいわ！一番いいのは、主人がいないことね！」と言っていた。ラフィアの家を訪ねていた時には、ただあいさつを交わす程度だったが、実際はこんなに活発な女性だったのだと目を見張った。

その後、せっかく桜を見に来たのだからと、千鳥ヶ淵へも案内した。お堀に覆いかぶさるような桜を見たり、桜並木の下の道を日本武道館まで歩きながら、写真もたくさん撮った。さらに、靖国神社を案内して桜を楽しむとともに、桜の標本木も案内した。

第1日目はそこでお開きとし、4人をタクシーに乗せて運転手に「椿山荘まで送ってください」と言って別れた。

2日目は、彼女たちだけで上野、浅草、浅草から浜離宮と日の出棧橋までの船の旅を楽しんでもらい、夜は銀座に出かけてもらった。3日目も彼女たちだけで、観光バスで箱根観光に行った。翌日は、新幹線で京都への4泊5日間の旅に行った。彼女たちだけにしてもよかったのだが、マダムたちには「ご馳走してやってね」との条件付きで、京都大学の博士課程にいたオマーン人留学生のムナに京都の案内を依頼した。彼女からは、「同じく京都大にいるオマーン人女性と一緒に京都を案内する。ホテルは？」とのメールをもらった。ホテルは、新幹線と直結の「ホテル・グランヴィア」と伝えた。

京都から帰った日の夕方に、私は家内と娘の3人でお土産を持って椿山荘を訪れた。その時にもラフィアから「4月末にオマーンにくるでしょう。その時には、この4人だけでハルーを歓迎するパーティーをやるわ！主人とは別よ！」と念を押された。

私はオマーン政府から招かれて4月下旬にオマーンに滞在している間、「オマーン人婦人4人とのパーティーが楽しみ！」とラフィアからの招待を心待ちにしていたのだったが、連絡がなかなか来なかった。「あれは、外交辞令だったかな」とあきらめかけた時に、「お茶を飲みましょう！」と声がかかった。われわれと一緒に小原がブサイナ王女に会うためにオマーンの大臣のところへ私の友人の要人とともに訪れている時だった。

こちら側は私と中江、先方はラフィアとマリウム。喫茶店の屋外の席で向かい合って座った。ラフィアから「パーティーでなくて、お茶だけでごめんなさい。実は、スライヤとアイシャがいまインドに旅行に行っているの。それで、パーティーができないの」とのこ

とであった。相変わらず、オマーン・マダムたちは大いに楽しんでいるなど感じた。小一時間、オマーン女性と歓談した。旦那さんたち抜きの楽しい時間であった。

われわれはその夜の午後10時10分マスカット発のカタール航空でドーハに向かい、10時55分に到着。25日夜半の2時10分にドーハを発って、同18時40分成田着のカタール航空でこの旅を無事に終えた。

### 17-7 変貌するオマーン女性 - サンバを踊る!?

私は世界昆虫標本のことでオマーンを訪問中、毎晩オマーン人の日本留学経験者をホテルに呼んで旧交を温めたことは既に述べた。

滞在中の夜は、外でオマーン人要人や日本大使館関係者などとの会食が入り、私がホテルに帰ったのは毎晩10時過ぎ。そんな深夜に、その女性たちが男性の付き添いもなく1人で私に会うためにホテルにやってきた。会う相手は高齢とは言え、一応男性である。しかも車を運転してやってきた。すっかり女性が変わっているのに、私はショックを受けた。

3人の女性は、1人が漁業省の役人、1人が大学の先生、1人が会社勤めといずれも立派な社会人でもあった。

女性は外にも出ない。顔を隠し、奥さんは旦那さんにしか顔を見せない。女性は外に出るにも男性の付き添いがいる。そんなことは、遠い昔になった。女性は大きく変わっていた。

そういえば、この訪オの5ヶ月ほど前にも、オマーン女性の変貌ぶりに驚いたのを思い出した。

日本オマーンクラブで毎年日オ学生交流会を開催していることは既述したが、それは2018年11月の交流会のことであった。中野成願寺でのイベントを終えて、22日にオマーン人学生を東外大の外語祭に引率した。ここの目玉行事は、語劇祭と各専攻学科の学生による各国料理の販売である。その他に各サークルの展示やイベントがある。その一つに「サンバ踊り」のショーがあった。オマーン人学生に「見る？」と訊いたら、男子学生2人と女子学生が「見たい」という。「女子学生も行くのか」と少し驚いた。

イベントが終わった後に、同行したクラブ員の女性から、「サンバ踊りは、あの人たち、オマーン人女子学生も女子だけの時にはやるんですって！」と聞いて、私は大いに驚いた。普段はヒジャブを被り、身体の線がでないような服装をしている彼女たちがサンバを踊る？ その実態に驚いたのである。